

有朋自遠方来



当館の庭園を色とりどりの花で満たす春の訪れ。花々には不断から館長以下一同の心が注がれ、特に守衛さんたちの丹誠がこめられています。もう一人、この花園の陰の功労者として忘れられない方を御紹介するのが本日の目的です。

吉年(よどし)忠雄先生(88才)。大阪河内長野にお住いになる農学博士でいらっしゃいます。正確なお歳を知ってびっくりするほどお元気な姿を隔週の日曜日毎にお見せになります。それは、先生のお好きな日曜映画会を御覧になるため、これまでの映画会に欠かさずお見えになっている唯一の方です。先生は「映画が好きなことと、この環境の美しさが良くて」とおっしゃいます。そのお庭造りには吉年先生のお力も大きいのです。夏ともなると門からのゆるやかな坂道を昇った左手に、橙赤色の花萱草が見られますが、この幾株もの苗を寄贈して下さったのが先生です。萱草は文華館の名画の一つである毛益の「萱草遊狗図」にも登場しますので、庭園にも同じ萱草の花が見られるというのは実に相応しいことではありませんか。この花ももう直き今年の盛りを見

せてくれます。また、裏手に回りますと池の傍に大山桜の若い樹が立っていますが、これも先生が御寄贈下さったものです。桜というと染井吉野ばかりがはびこっている昨今、大山桜は数も少く、順調に育っているこの若樹が早く成熟して館の名物になってくれることを私達は望んでいるのです。

三高から東京大学へ進まれ、御卒業以来、御自宅の杉の山を守って造園をも広く営んでいられる博士は、珍しい品種の植物を耳にされては、日本各地はもとより、海外にまでお出かけになり忙しくも楽しいお元気な生活をなさっていらっしゃいます。何と羨しいお話でしょうか。花や植物は誰でもが心寄せるものと思われませんが、絶えず自然の生命の営みに深く接していらっしゃる御生活はまことに羨しい限りです。

御来館の度に館長と植物談議を展開なさり、西洋梨、ブロッコリー、チャイブス(西洋ネギ)等の先生御自慢の作品を館員の私共もお土産に戴いて、光栄にあずかっています。(写真は館長と談話中の吉年先生一向って左)

季刊 美のたより No.31

昭和50年3月1日

発行 大和文華館